2000年11月15日発行(毎月1回15日発行) 通巻268号 平成2年2月5日第3種郵便物認可

産・官・学を結ぶ――

私学ジャーナル

VoL.23 No.10
2000/11

座談会

「いのちの尊厳」を謳った文・理学際の「人間環境学部」(申請中)
21世紀循環型社会に向け「総力」を結集
大阪産業大学

特別対談

なぜ、今「短大革命」か
日本私立短期大学協会会長　川並弘昭氏

「人物(コスチューム)」

株式会社 私学教育振興会

座談会

21世紀循環型社会に向けて「総力」を結集

「いのちの尊厳」を謳った文・理学際の人間環境学部

（申請中）

大阪産業大学

出席者

大阪産業大学	理事長	古谷 七五三次 氏
大阪産業大学	人間環境学部長（予定）	中野 広 氏
甲南大学	文学部教授	谷口 文章 氏
司会進行	本誌主幹	武田 龍二

大阪産業大学＝大阪府大東市は、循環型社会への移行が予想される21世紀に向け、来年４月を期して「人間環境学部」を設置すべく準備を進めている。大量生産、大量廃棄で行き詰まった20世紀社会を立て直すには、その結果としてもたらされた環境問題を解決するためにも資源の再利用など循環型社会の実現が叫ばれている。同大学が開設を予定している人間環境学部は、これから起こり得る環境に関する諸問題と正面から取り組み、個性と特色ある都市型大学の中核としての展開が期待されている。同学部の特色は何といっても「人間」と「環境」をキーワードに既存の理科系学部と文化系の学部を学際的に統合していることである。そこで開設を前に学部長に就任予定の中野広教授を中心に同大学理事長・古谷七五三次氏、日本環境教育学会事務局長で甲南大学文学部教授の谷口文章氏に出席を願い、同学部の内容や狙い、これからの環境教育のあり方などについてただしたり、語っていただく座談会を開いた。進行は本誌主幹・武田龍二が担当した。

武田　大阪産業大学に新しく人間環境学部が設置されることになり、現在その準備作業が進められています。環境という言葉は産業界をはじめさまざまな分野で広く使われるようになり、大学など高等教育機関でも環境をキーワードにした学部学科がこのところ増えています。そういう中で人間を環境学の中心に据えた人間環境学部は内容的にもユニークな学部であり、きょうの座談会も21世紀に避けて通れない環境問題と取り組む人材育成をテーマにしているだけに、新年度にも開設が見込まれる人間環境学部をご紹介いただきながら進行させていただくことで弾みがつくのではないかと思います。座談会には環境学の分野で広く国の内外でご活躍中の甲南大学の谷口先生にもご出席いただき、意見交換やアドバイスを賜ることになっています。では最初に今度学部長に就任予定の中野先生から、新しい時代の環境問題に取り組む人材像について、どのようなイメージを描いておられるのか、お話しいただきます。

大量消費・廃棄は20世紀型悪循環

中野　私どもの大学ではご承知のとおり経営と経済、それに工学の３学部がございます。この分野では非常

に高名な谷口先生を前にお話するのはちょっとはずかしい思いがしますが過ぎゆく20世紀は、人間の暮らしぶりがより快適かつ便利になるようにあらゆる角度からの研究と努力が続けられ、実際に必要とする事物が思いどおり開発されてきたものと思います。ところが世紀末に近づくにつれて生活面において大量消費、大量廃棄という悪循環が加速してきました。また学問分野においても、例えば経営学は世の中の利便性とか企業経営の効率性という角度からの理論が展開されていて、大量廃棄されたものを再利用するといった循環型社会の考え方はまだ構築されていません。工学部における研究も、クリーンとかリサイクルといった考えに立って行われるようになったのはごく近年のことで、体系的なものはでき上がっているとはいえません。

しかし私達は21世紀となっても快適な暮らしをしたり、もっと豊かになりたいという欲望は変わらないものと思います。またそういう気持ちが原動力となった活動でなければ経済的に国の発展は期待できません。そこで何が重要かといえば、人間と自然との共生、資源の循環という考えが仕組まれた新しい学問分野の台頭が望まれます。そしてこのような発想のできる青年を育成してゆくことが21世紀にむけて必須な要件になってきます。既存の三つの学部を生かしながら、いま申し上げた循環型社会の考え方を新しい学部に集約出来るとしたら、大阪産業大学は、大学の名称にふさわしい、21世紀型の大学になるのではないかとひそかに自負しています。

▲座談会風景

武田　この学部で大学4年間を通し、学生にどんな指導をなさっていくおつもりでしょうか。

1年の時から目的を明確に

中野　アメリカと違い、これまでの日本の大学は学生に対し、何を目的にという意識づけをあまりしていませんでした。そこで私たちは1年の時から学ぶ目的を明確にしていこうと考えています。従来の総合教育科目、つまり教養科目と専門科目を1年次から連結した形で学ばせようとするのもその1例です。つまり世の中の具体的な事例の中から理論を学び取らせるやり方です。新しい学問分野の理論は体系づけられていないから自分たちで試行錯誤しながら、それなりにルールを見つけていく。そしてでき上がった理論を世の中に生かすにはどうしたらいいかということを絶えず意識しながら各地域・諸分野で起きているさまざまな環境問題を1年生の段階で体験してもらいます。そして個々の環境問題を通じて培った物事への取り組み方、考える力を養い創造性、豊かな人間性、そして自ら行動を起こし解決していける能力を育てていきたいです。卒業後は必ずしも環境の分野に就職しなくても従来型の産業や公的な事業所に勤めてもどこか発想が違うといわれ評価が得られる人材として社会に巣立ってもらえればと思います。

武田　私たちは2年ほど前、東京電力と伊藤忠商事の環境担当の方々をまじえ環境教育をテーマに座談会を行ったことがあります。その時、東京電力の方がおっしゃっていたのは、これまでは環境問題を担当する部署にまかせておけたが、これからは各部署が環境に関する情報を日常的に取得し、処理していく時代となったということです。逆説的に言えば生産過程のあらゆる部門で環境問題に対処する機能を持たない企業は存在しにくくなるのではないかということでした。そのことを思い出しまし

▲谷口　文章氏

た。環境問題は要するにどれだけ時間を未来に残せるかということです。そう考えると環境問題は教育研究のテーマとして経済学部や経営学部、その他各学部にもあって当然ではないかと思います。谷口先生はどのようにお考えでしょうか。

科学オンリーでない 2つの学科に特色

谷口　いま資料やパンフレット等をを拝見させていただきましたが、環境に関する学部として素晴らしいと思うのは、文化環境、都市環境という2つの学科で構成されていることです。普通よくあるのは、環境科学部であり、中心になるのはサイエンスです。しかし欧米ではエンバイァラメンタル・サイエンスという単数ではなく、スクール・オブ・エンバイァラメンタル・スタディーズ（環境学科など）と複数形になっており、決して単独の科学だけではありません。そのような意味では人間環境学部は、総合学部的な要素と、すでにお持ちの工学部や産業学の要素を合体させたような理念とか学部の考えが感じられ、非常に期待しております。

中野　おほめいただき、ありがとうございます（笑い）。

武田　強いて分けるなら、文系型ですか、それとも理系型でしょうか。

中野　いま谷口先生がご指摘のように文系と理系が合体しているということになりますか。

新しい学問体系の構築

古谷　「環境」をキーワードに複数の学問分野を意識して設定したという点では学際的になっていますね。私どもがここで考えている「環境」とは公害問題だけでなく、文化、社会、生活など人間を取り巻く広い範囲の事象を含んでいます。ある意味で「人間とは」という哲学的な視点を21世紀の環境のあり方を通して考え、現実的に対応していくことを目指していると言えると思います。これまで、「産業」を定点にして本学が蓄積してきた知的資産を、学部を超えて「環境」という視点から捉え直し、新たな学問体系を構築していきたい、それも「人間環境学部」に込められた狙いです。だから、必然的に学生の皆さんが参加し、直接考えるということが、この学部では優先されてくることになります。「文化環境」は過去と現在、未来を基軸にすることができますし、また「都市環境」は自然、地方といった空間的な視点を基軸にすることも可能だと思います。つまり、学生自身が人間として、環境をどう認識し、現実的に関与していくのか、大切なのはそこを掘り下げていくことだと思っています。

谷口　文化環境と都市環境、その中をとりもつ自然環境と基礎科学、そして経済、社会の環境政策があるというのはバランス的にもよく練られていると思います。これまでは環境といえば科学技術の方向で破壊があった場合は、科学によってそれを回復できるという楽観的なところがありましたが、人間という要因を抜いては考えられないのが環境問題のむつかしさだと思います。そういう意味で人間環境学部は、人間環境（ストックホルム）宣言の中で初めて人間と環境がつながった経緯を顧みるまでもなく、環境における人間の位置づけを明確にし、自然科学だけでなく、人文科学、自然科学を合わせた総合的発想が必要なことを提示された、ということで非常に意義のある学部だと思います。

中野　いま指摘いただいた中に文化環境というのがありますが、そもそも文明の発祥を考えた場合、農業をやるにしても自然への畏敬なしには何もできなかったはずです。大雨や干ばつも避けられないものとして受け止めながら、糧を得てきたのです。そのような自然環境のもと、鎌や鍬などの器具が徐々に発達してきました。そして科学や技術の発展をもたらし生活の変化は文化として定着していきます。お祭り一つ取ってもその時代時代に人々が創造した文物が

入り込んで出来ているわけです。日本の農業も環境悪化を経験して、その反省から多少変わって来ていますが、私自身、子どもの頃、畑仕事を経験していますが当時の土は暖かかったことを覚えています。しかし数十年して、かつて所有していた畑が漆喰のように固まっていたことにおどろいたものです。肥料で土が死んだようになっているのですね。この状態は進んだ科学が環境に配慮しなかった悪例だと思います。確かに人間が手仕事でコツコツとやるだけではいまの時代、効率的でありませんし、質的な改良に対しても限界があると思います。衣食住を文化の始まりと考えるなら、その後の科学はいずれにも微妙にからんでおり、自然に対し蔭に陽に影響を与える要素をもっていて、分離して考えられない。このような問題が見え隠れしている今日、もう一度人間が生存してきた長い歴史をふりかえり、人間の生存にとって何が大事であるか根本から問い直す必要があると考えます。そうすると環境の学習は、谷口先生のご指摘のように欧米型の複数形のアプローチにならざるを得ないと思います。

武田　では学生が実際に学んでいくうえでのカリキュラムですが、もっとも重視している点があるとすれば、それは何でしょうか。

学生自身が教材を探す

中野　前にもちょっと触れましたけれど、出来上がった学問や教科書を一方通行で教えるというのではなく自分たちで教材を探して勉強していく。このような姿勢を大事にしたいです。今日教材はいたるところにあり、それを拾い上げて学ぶという、フィールド・ワーク形式の教育の充実をさせたいと思います。一方、文化という面から言いますと、自分たちの文化をまず理解することです。そうすることでグローバル時代において相手の文化も相互に理解でき、対等におつき合いしていける土壌ができます。そういう意味で文化を基本から勉強することも大切であります。大学の周辺ですと鴻池新田など手ごろな学習の場が豊富にあります。

物おじしない語学を

次に語学です。私は語学が得意ではありませんが、企業にいた関係で海外開拓の先兵として地球の隅々、いや日本大使館のないところにも出かけていった経験があります。しかし英語圏ばかりではないので、とてもきちんとした言葉が使えない。ひどいブロークンですよ（笑い）。それでも最終的に契約となると、きちんとしめくくらないと会社に損害を与えることになりますから、辞書を引きながら対処したものです。上達の秘訣はやはり実体験することではないでしょうか。もう一つの工夫はクラス分けです。英語嫌い組、英語ヘタ組、英語上手組、というようにいくつかのグレードに分けてクラスを編成します。これによって嫌い組、ヘタ組も仲間うちといいますか、周囲はみんな同じレベルだということで恥ずかしがらずに英語に集中でき

▲中野　広氏

ます。語学は場数を踏むに越したことはありませんが、その前に嫌い、ヘタを理由に敬遠してしまうとその場も生まれません。同じようなレベルの人たちの中で少しでも向上出来るように英語の先生方に工夫をお願いしています。語学一つにしても入学した時と比べてこれだけ上達したということを自らが判断できるようになればと考えています。それが自信となって諸文化圏と積極的に交流できるきっかけになればと思うのです。三つめの特徴としての情報処理技術ですが、情報化時代を乗り切っていくためにコンピュータのリテラシーを学ぶことは当然として、社会に出た時、コンピュータをどの程度扱えれば実際に役立つのか、そんな応用面のことも配慮していて高学年にいたるまで力を入れてゆきたいと考えています。

心身の面からアプローチ

科目としては、谷口先生も強調し

▲古谷　七五三次氏

ておられたように、人間の本質と深くかかわった部分に力を注いでまいりたいと思います。文化環境学科の中に心身コースというのがありますが、例えば小学生でも「癒し」がテーマになる複雑な時代です。また家庭や学校でも様々な問題を抱えています。これらの問題に対し、心理や健康の側面からアプローチし展開していけば個人が自らの回答を引き出せるという自主性について身をもって学んでもらえるようにしたいと思います。

心身の鍛練が生む自主性

個人的な話で恐縮ですが、現在66歳でジムに通っています。そこでトレーニングしていると筋肉がつき、体型が変化しますしプールでは水をかき込んで泳げるようになるのですね。少子高齢化時代といいますが、高齢者のケアをどうするのか、その為にお金をどう使うのか、いろいろ対策を考えているようですが、本人が前向きに健康と取り組む姿勢が必要だと思います。特に若い皆さんからこういう発想が必要な時代ではないかと思います。個人が心理的な面でも身体的な面でも前向きに考えてゆけばどのようになる、ということを自分なりに体験させ、自分なりの考えを確立してもらう。つまり自立した個人が活動できる個人基盤教育ができればいいなということです。そのために、学生と教員の関係があらためて問われます。そこで予定していますのは双方向性的な担任制です。これをやるにはまず教師が大きく変わらなければなりません。このもくろみを1年の段階できちんとやっておかないと上級学年に悪影響をあたえます。特に初年度はできるだけ厳しく意義あるものにしたいと考えています。

武田　企業に聞きますと文部省の環境教育に対する取り組みは10年遅れていると言います。対策といえば公害問題ですが、環境問題は単なる対策ではなく公害問題を含めもっと広い概念だと思います。快適な環境を作ることは私たちのライフスタイルと結びついています。公害の領域で捉えるにすぎなかった環境問題をもっと幅広く認識し、日常生活の中でどのように解決していったらいいのか。そこで文部省は総合学習の中で環境教育を行うよう指導しているのですが、現場の小・中学校の先生は何をどう教えていいか分からないし、目下その議論が行われている最中です。環境社会学科を開設した京都精華大学で学科紹介のため京都の高校を説明して歩いた学長先生は、高校の先生も環境学とはどういう学問かといった素朴な質問が多く、まず現場の先生方に理解させることが先決というような話をなさっていました。谷口先生に専門的な立場でお話しいただきたいのですが、環境問題は私たちの生命・財産と深くかかわり、ひいてはライフスタイルにも大なり小なり影響を及ぼしかねません。ここまではっきりすると小・中・高校だけでなく大学も含むあらゆる教育機関で必須的に教える必要があると思いますが……。

注目したいフィールド・ワーク

谷口　その前に中野先生が紹介されていたことに関連して一つひとつお話させていただきたいと思います。第一にフィールド・ワークを重視されている点は非常に魅力的だと感じます。フィールド・ワークとフィールド調査という言葉がありましたけど、欧米では学生たちが企業に実習に行って勉強した事柄も単位となるようにしてあります。それからフィールド・ワークの場合、環境ボランティアに行き、そこで勉強したことも単位になります。またそこを終って小・中・高校生のリーダーになることもフィールド・ワークとして単位になるわけです。だから開かれた大学ということと体を動かすということが結びつけばもっとよくなる、その可能性はあるということです。

国際会議にも文化のずれ

それと文化と関連してよく国際化

という言葉が使われ、それもひとり歩きしている現状です。本年はタイ、昨年は中国で「環境倫理と環境教育」の国際会議を開催しましたが、相手方とこちらの意向に最初の間はずれがあります。中国の北京大学で開催した時は官僚制という形の発想でないと頼んだことが中国側に通じません。タイの王立大学の場合は個人的には分かり合っているつもりでも、いざという時は個人々々が思いのままやるのですれ違ってしまうことがよくあります。そこでもう一度自分たちが固有の文化を確認して、それぞれの文化のずれとのギャップを勉強することが必要だと思います。固有文化を勉強することは国際化に直接つながることでもあるから語学なども盛んにやっていただくのはいいことだと思います。

ぜひアジアの言語を

その語学については上級のクラスを設け、プラクティカルな語学やアジアの言語を取り入れることが必要ではないかと思います。環境という場合に私たちはどうしても学問的に欧米の方を向いてしまいますが、本当はお隣の国、アジアと向き合わないと何もできないということです。とくに環境問題に国境はなく線を引くことはできません。しかもアジア諸国は隣国同士です。大気汚染を例にとると、大気汚染など、中国のある都市で生じた問題は中国全体に広がり、国境を越えて日本、そして全世界に拡散していきますから空間的には地球は一つ、「オンリー・ワン・アース（かけがえのない地球）」という発想がないといけない。さしあたって語学、中でもアジア系の語学が強調されてもいいのではないかと思います。

コンピュータはあくまでも手段

コンピュータ・リテラシーについて申しますと、中国では幼稚園からやっています。それがいいかどうかは別問題としてコンピュータはインターネットで全世界とつなぐことが可能ですから、そういう意味での国際化は進むのではないでしょうか。しかし実際は人間と人間、心と心の触れ合いが大事であることは忘れてならないと思います。その前段階として普段からの国際交流、情報としての国際化にコンピュータが大きな役割を果たすことは確かだろうと思います。科目の中では人間の本質を追求するということで、一方で人間の存在論という哲学的な科目もあれば、他方では心身環境学という心理的科目も押さえておられる。さらに、そこにもう一つつけ加えるなら健康科学だと思います。このあたりのことも含めて考えるなら、人間の本質的部分に迫っていけるのじゃないかと考えます。先ほど中野先生が筋力の話をされましたが、私もよくスポーツのできる学生に言うのですよ。キミ、陸上をやってて1日休んだら筋力がどれだけ衰えるか知ってるだろう。元へもどすのにどれくらい時間がかかる？1週間ぐらいと答えます。筋力の回復が1週間だったら、1日、本を読まないと脳はどうなる？ということなんですね（笑い）。だからやるべきことは普段から当然のようにやるように心がける。筋力の衰えはすぐに気がつきますが、いま若いからこそ頭の中の筋力も鍛えるべきだし、カリキュラムもそのような習慣が身につくようなものであればと思います。さらにつづけてよろしいですか。

武田　どうぞ。

体系化につながる試行錯誤

谷口　先に担任制の話が出ていましたが、2年前に日本アジア太平洋環境教育セミナーというユネスコ主催の国際会議があり、その時問題となったのが「環境教育の教材」をどうするかということです。これも新しい教育分野ですので試行錯誤を重ねながら内容を詰め、体系化していくのが必要じゃないかと思います。昨年のユネスコの会議で問題となったのは環境教育を教える「教師の資質」のことです。いま担任制のことが話に出ましたが、大学の先生方が担任を受け持つ中でどのような指導をなさっていくのか非常に興味があります。環境といえば色んなものを含んでおり、すべてを研究するというのは無理があります。環境学原論みたいなものがあれば別ですが、これはまだ確立されていません。そうするとそれぞれの先生方の専門分野を踏まえ、そこから環境にかかわっていくという、周辺への広がりを持った形での担任制は必要かなと思います。今年12月またユネスコ主催の会議がありますが、そこで問題となるのは

「ネットワーク化」です。お話に出ていた情報化のことはこの中に入ってくると思います。

ユニークな都市生活環境学科

つづいて都市生活環境について正面から取り上げておられますが、これは具体的な場面での都市環境であり、都市生活環境です。他の大学にはない学部学科ですからぜひ期待したいです。もう一つ申し上げたいのが学部のあり方です。多くの大学はいまでも法、文、経、理、工、といった分け方ですが、ひところはやったのに総合政策学部というのがあります。各学部の共通するものを持ち寄って新しい分野の学問を体系づけるところに狙いがありますが、21世紀のキーワードはやはり人間と環境だと思います。人間だけを優先させる人間中心主義というのもありますので、「いのちと環境」というように考えていいと思います。いのちと環境は総合的なものであり、そのいのちは人間に対してだけではなく、あらゆるいのちに共鳴できる「いのちと環境」であれば素晴らしいと思います。

本末転倒の総合学習

それと武田さんのお尋ねの総合学習の件です。これは現在、小・中・高の段階で問題になっており、文部省が考えている総合学習に入れる科目は環境、国際理解、情報教育、健康・福祉の四つです。小・中学校で講演させていただく時によくお話しすることは情報教育がコンピュータ教育になり、国際理解が英会話になりやすいということです。ＰＴＡあたりの圧力がかかると環境や健康は最初から軽視されてしまうことさえあります。手段であるコンピュータや英会話が目的化して、人間にとって目的でなければならない環境とか健康・福祉を軽んじる本末転倒の総合学習はあってはならないですし、本来の趣旨に沿った総合学習を実施してほしいと思います。

小・中・高がうまくやっても大学側に受け皿がないと意味がないです。そこで総合科目を受け入れるようなより専門的な、より応用ができるような形での受け皿が必要となってきます。そういう点からいけば、この四つの分野というか学科がかなり適切な受け皿になるのでないかと思います。ただ大学は小・中・高などの教育にはあまり視線をやりませんので、大学の側もこれからは小・中・高の現状も注意深く見守っていく必要があると思います。

武田　教育現場はともかく、文部省も環境や健康について積極的に関心を示すようになったことは総合学習との取り組みをみれば分かります。そのためには環境教育にかかわれる専門の教員も必要となってくるし、資格としての教員免許も検討されていくのではないかと思われます。そこで私が思うにはこの人間環境学部で環境教育に携わる教員を養成するといったもう一つの展開があってもいいと思いますが、古谷先生はいかがでしょうか。

都市型大学にふさわしい学部

古谷　いまのお話を伺っていて、本学のような都市型大学にとって、人間環境学部はいま、正にふさわしい学部であり、計画して間違っていなかった、と改めて思います。教育行政を含めて、社会的にも、国際的にも環境への取り組みが重視されていることを踏まえて考えると、本学の取り組みもまだまだ色んな展開が期待できますし、ゆくゆくは大学の推進的な役割も担ってくれるようになるのではないか、そんな期待が膨らみます。いままでの大学教育がやろうとしてできなかったことが、本学の人間環境学部の設置によって大学での勉強が地域と密接に関わりを持ち、学生の参加型で行われるというこのやり方で突破口となり、結実していくことは、大学の個性化、独自化を具体的に示すことになるでしょう。学生が自分の関心を先生と議論し、研究テーマとして確立し、その問題点を地域の中で、あるいは諸外国の人々との交流の中で、自分の体験として形あるものにすることは、非常に幅のある教育だと思いますし、この点を推進することで、若い人のチャレンジ精神、あるいは市民レベルでの国際交流、正にグローバルな環境マインドを培うことができるはずです。しかも、若い人たち自身が、さらにネットワークを広げてくれれば、本学をキーステーションにした国際的なボランティアも可能です。実に楽しみです。

武田　谷口先生のおっしゃっていた21世紀のキーワードが「人間（いのち）と環境」とするなら、このテー

マを実現するには何よりも環境教育が大切ではないかと思います。その意味でも次世紀に必要とされる企業人の養成だけでなく、ぜひ環境教育教員の供給源になって欲しいと思います。文部省も教員養成からはじまって指導要領の中できちっと環境教育を押さえてくれないと総合学習自体がいつまでも地に足がつかないことになりはしないかと心配します。先ほど古谷理事長も各学部が単独でやれなかったことを総合的に学際的にやれるということで新しいものが生まれ、運用いかんでは大学の柱になると期待されていましたが、中野先生、開学にあたって最初に手がけたいことがあるとすれば。

望ましい地域との円滑な協力関係

中野　谷口先生のお話にあったようにボランティアとかメディア関係、まちおこしというようなフィールド・ワークを考えています。1年生ですから人騒がせなことになる可能性もあるとは思いますが、地域の方々にもお願いして施設を使わせていただくとか協力を求めたいと考えています。もちろんお世話になるだけでなく、調査などで利用できるものがあれば学生を利用していただくこともけっこうです。お互いに協力し合う関係ができれば、体験を通して自分たちも世の中のお役に立てるということが金銭的対価関係を抜きにして分かってきます。このほかにも先生方からの提案はいろいろありますが、1年次に多くのことを幅広く体験し、その中からもっとも関心のあるものを見つけ、2年以降はそれを専門的に深めていくといった道づくりを一人ひとりにやらせたいと考えています。

フィールド・ワークは教員それぞれのご専門の分野であれば何とかなるにしても、担任となると学生一人ひとりの進路にかかわることになるため、要望をどう受け入れていったらいいか、困難が待ちかまえています。開学までに勉強会を行い、理解を深めていってもらうことになります。

武田　21世紀は環境と健康、そして観光、すなわち3Kの時代といわれます。そこで環境の中に観光を切り口にしたコースまたは講座を検討されていないかお聞きしたいです。

環境と表裏一体の観光

中野　これから述べることは私的な研究に入りますのであらかじめおことわりしますが、産業政策ビジョンづくりをお手伝いしている岸和田市では将来、観光を産業の一つの柱にしようという計画があります。この計画が成功すれば観光も教育研究の対象として学部教育の中に取り入れることができます。文化や都市環境の立場で観光は一つの課題であることには違いありませんので、私たちもぜひやってみたいと思います。

観光には柔軟に対応

古谷　観光をベースにした学科設置のことは、本学が観光と密接につながっている交通工学部門を母体とし

て発足した経緯を踏まえて、以前に文部省に申請したことがあるんですよ。私どもが考え、目指していたことを行政側に共感してもらうには、まだ時期早尚というか、時代の先を行きすぎていたのかもしれませんが…。当時、文部省に言わせれば、「観光」なんて学問のうちに入らないということで、まともに相手にされなかったんですよ（笑い）。当時は「観光」の分野に強い先生も2、3人おられたのですが、私どもの考える「観光学」を軌道に乗せるまでの障害突破をあれやこれやと考えながらも、状況の厳しさを痛感し、半ばあきらめていたというのが実情です。社会や企業からのご要望が強いのであれば、カリキュラムで対応することもできるでしょうし、また、環境学と一体化したものとして今後柔軟に考えることも可能だと思います。大事なことは、本学が実業界との関わりの中で、実学面での人材育成に取り組んできた大学であるということです。本学は、社会や実業界にとって有益

であることを推進し、地域に密着していかねばならないということです。

武田　ついでに申しますと、世界の観光学会に出ると、観光イコール環境と言われくらい、観光と深くかかわってくるのが環境だという話をある観光学の研究者から聞きました。観光は交流であり、異文化理解であり、文化財保存ですが、グローバルな視点からアプローチすると確かに環境との共通点が多いことに気づきます。アメリカで森林法を深く研究しているのは環境と観光の先生ということが広く認知されているぐらいですし、環境を学ぶ学生も文化財保存とか異文化理解といった観光学的な知識を少しなりとも身につけられたらと思います。ちょっと脇にそれましたが、谷口先生、いかがでしょうか。

都市型大学の適応力

谷口　先に古谷理事長がおっしゃいました都市型大学というのはいい発想だと思います。創設者の「偉大な凡人たれ」という教育理念と都市型大学としての特性とが相俟って産業の育成を目指すことだけでなく、地域との結びつきにも拡がっていくものがあります。それだけに環境は当然視野に入れておかないといけないし、そのような意識を持った学生を育てることは都市型大学がもっともふさわしいのではないかと思います。先に武田さんから指導者や教員育成を含め、あらゆる情報や機能がこちらの学部に集まるようにしたらどうだろうという提案がありました。中国の北京大学を例にとりますと、環境教育には四つの種類があり、これが参考になろうかと思います。一つは環境教育の専門家を育てるコース、もう一つは企業に居ながら学ばせる在職教育、三つ目として社会人教育があり、最後に小・中・高校に対する環境教育のマニュアルづくりと実践といった分け方ができます。その中で武田さんが言われたのは、環境教育学の研究と環境教育の実践と具体化のようなものではないかと思いますが、いずれ社会人教育とか生涯学習の中にも入りうるものであり、実現はむつかしくはないと思います。

観光と環境創造

それといわゆる観光学部のことですが、およそ二つの要因があると思います。それは文化と地域の問題だろうと思います。文化は主として時間的継続の長さですが、環境教育の場合は環境破壊の現状認識が重要です。それも伝承があってこそ基準が分かり、固有の文化は守られていくわけです。そのような時間的な要因からアプローチしていくと、岸和田という地域、つまり空間的な地域性と時間的な伝統文化が交差したところに観光地という環境ができ上がることに気づきます。その場合、学問的にいえば、環境破壊の現状認識と環境の復元の過程で、観光プランとか環境デザインのような、大学の研究分野としての環境創造につながる作用が生まれます。だから従来の観光より少し幅が広く重みがある形で観光と環境創造を考えていけば、環境認識と回復・復元を一挙に実現でき、さらに新しい文化の創造、地域の活性化にもつながると思います。

武田　中野先生、いまの谷口先生のお話から何かイメージされるものがありますか。

中野　谷口先生のお話を聞いていますと、観光を取り上げることは農業や漁業、林業の復興につながる意味がよくわかりますね。これは環境の回復でもあるわけです。テーマパークでもミュージアムでも、順調に成長しているところがあるかと思えば人々の関心をつなぎとめられないところもあります。これはどれだけうまくプロデュースできるかに尽きますが、いちばんいいのはやはり自然発生的な土着性だと思います。日常の生活習慣はその土地の人には物珍しくも面白くもないが、よその人がみると新鮮で楽しく映ったりします。これも観光資源の一つだと思います。いらっしゃい、これをやっています、ではみえみえの誘致であり一発花火で終わってしまいます。環境から観

光、そして産業というふうにリンクさせていくといい方向に進んでいくということが頭の中にあります。カリキュラムを見ていただくと分かりますように観光概論も入れてありますし、各種環境問題については網は大きく打っているつもりです。そんな中で都市型大学にもっともふさわしいものは何かということは運営している間に確定していくでしょうし、方向も定まってくると思います。

環境と経営倫理

ところで、一般受けするかどうかは分かりませんが、私がぜひ入れてみたいと思っている科目として経営倫理があります。景気が上向きで経営も調子がいい時はそういう考えが生じますが、不況になると目先の利益を考えた政策的なことが全面に出て倫理がかげをひそめます（笑い）。このような考えは売り上げ増につながらないし企業はあまり歓迎しませんが、経営倫理が企業にしっかり根づくかどうかは日本の将来を決することになると思います。経営倫理は就職してから身につくものではなく、本来子どものときから情操教育をつうじて基礎的な養成をしておく必要があります。

武田　それと経済団体の方がよく言われることは、日本の大学は一に研究、二に研究といわれるぐらいによく研究するが、経営的な面で寄与できる研究はなされてこなかったということです。21世紀は生産や経営的な考え方でも20世紀とはずいぶん違ったものになることが予想されますし、環境や観光という人間の健康や生活に密接な分野が産業にとっても重要になることは容易に想像できます。同時に価値観の変化は経営倫理にも当然影響し、いい方向に変わっていかざるを得ないとも思われます。産学協調については物づくりを中心にした工業技術関係の連携は21世紀も続くにしても環境や観光に関する連携もこれからはもっと強く大きくなっていいと思います。

企業の無責任体質が経営環境を悪化させる

中野　まさにそのとおりですし、企業の望ましいあり方だと思います。しかし現実には目に見えない圧力があるのが日本の企業です。近代的な経営方式をとっているとみられがちですが、経営陣といわれる役員は社内から年功的に取り立てるのが普通でしたし、いまでは一般的になりつつある社外役員もひところまでは例外にすぎませんでした。監査役も企業内部から企業の息のかかった人が選任されることが多かったものですから、社長の業務遂行や経営状態を正しくチェックできない。結局は長い物に巻かれろ式に流されてきたものです。このところ相次いで起きている経営陣の不祥事は、隠ぺいし、隠し通せなくなったところで出現してきたもので、企業の無責任体質として世の糾弾を受けるところとなっています。責任体制というか、経営の構造的な部分を徹底して直さないかぎり全体として日本の企業はよくなりません。経営倫理という概念を持ち出さざるを得ないのは、環境の世紀を迎えて必要不可欠な要素になると考えているからです。

儲け主義で割り切れる時代は終わった

社会を構成する組織人として何が必要かというような人間の考えを大学教育で変えていく。時間と手間のかかる仕事ですが、これを怠ってはならないと思います。さらに企業の現場でこのような問題を制度の中にどのように取り入れるかというシステムを新たに構築する必要があります。会議を行う場合儲け主義だけがすべての価値基準になるのではなく、逆にそれを許さないようなシステムを日本でも構築しなければいけないと思います。

私事になりますが、かつて経営工学会の関西支部長をやっている時に経営効率のことばかりの評価基準となるのではなく、ほかに社会への貢献という視点で経営指標を作らないといけないのではないか、それをやるのが経営工学会のこれからの役目ではないかということを提言していましたが、なかなか受け入れられなかった想い出があります。15、6年前のことですので不成功に終わりましたが、今は心機一転時代も色んな経験を積んで変わりつつあると思いますので、この時期にシスティマチックな方法論を考え出す必要があります。そしてそれを企業と協力して大学が提案すべきと思います。そのためには先生方がそれぞれの分野に精通し、遺漏なく仕組まなければなら

ないと思います。

武田　立教大学観光学部長の岡本先生もおっしゃっていましたが、ホテル経営にしてもきちんと教える大学がないから、その分野に進む人はみなアメリカの大学に留学しているようです。ふとそれを思い出しました。

中野　病院経営についても日本にはなかったと聞きました。かつての日本医師会長・武見太郎から内命を受けたお弟子さんから聞いた話ですが、医事行為と病院経営は異なるので「経営を教える大学を必要としている」とのことでした。ホテル経営、病院経営にかぎらず、あらゆる分野で経済活動している組織体を経営面から実際的に、また学問的にフォローするのはアメリカの大学の産学協同の成果に学ぶべきと思います。

武田　先の立教大学ですが、観光学部に博士課程ができてから中国からも留学生がくるようになったとのことです。観光を通じて観光学が盛んな中国、韓国の大学との連携、交流の幅も広がっているようです。面白いのは観光に力を入れているこれら外国の大学は、環境についても関心が高く、研究的にも蓄積が多いという共通点があるようです。そこで人間環境学部にもできるだけ早い時期に大学院を設け、立教の観光学のように環境学のメッカになって欲しいと思います。中野先生、いかがでしょうか。

中野　学部の完成年度がまいりましたら当然そうなっていくと思います。学部の設置認可も下りていない段階でその話をするのはちょっと早すぎますのでお許しいただきたいと思います（笑い）。

武田　谷口先生、いかがですか。

環境と観光が重なり合ったカナダのモデル都市

谷口　立教大学の動きはずいぶん参考になると思いますね。環境の場合は、計画的にするのではなく、まず開拓し、ダメになるとそこで手当てをするといった具合で対症療法的な解決になることが多い。アメリカのフロンティア精神というのか、欧米によく見られる傾向です。外国の複数の大学で講義していますが、カナダのビクトリア市の大学の場合は、世界で１、２を争うような美しい景色の中にあります。まさに観光と環境が重なりあったモデル都市に育まれ、環境としてはこれまでのお話の中に出ていた発想が実現化されている地域だと思います。ビクトリア市はイギリスよりもっとイギリス的といわれ、実際交通のマナーは市民の間に行き届いており、ビクトリア大学における環境学の定着度もかなり高いです。新入生は季節のいい９月、10月になると、何度も、素晴らしい景観を背景に、キャンパスにエコ展示の屋台が出されて歓迎を受けます。環境に対する意識が違うのですね。テレビも例えば15局のうち５局は度々環境に関するニュースや情報を流しています。しかも啓発だけに終わらず、実践されているところが素晴らしい。だから観光客もいっぱいやってくるわけです。

そこでなぜ環境を保全しようという精神がうまれるのか、それは数万年前からこの地に住んでいるネイティブの人たち、これはファースト・ネーションズと呼ばれるカナダ・インディアンのことですが、この人たちが数万年もかけて守ってきた環境をせいぜい100年前にやってきた欧米人が破壊してしまったという意識が強いからです。これが負い目になって開拓精神とは違うセルフ・コントロールの精神がここに育まれた。つまり原生自然を守るためには、できるだけ土着の文化を守らなければいけないという意識と人間活動のバランスがうまくとれているのですね。

内発的発展の地域文化

そこで観光についてですが、固有の文化と地域があるからこそ、生まれる内発的な発展という考えがあります。さしずめ岸和田のだんじりは、まちおこしに付随して出てくる典型的なケースだと思います。要は発展するプロセスが大事であって結果はあまり重視しないというのか、何が

起きるか分かりません。それでもうまく地域文化が形成される。そこには一つのシステムがあります。企業でいえば、企業体というアイデンティティの組織的均衡を保たせるのは企業人の使命です。その場合自己の利益のみを追求してまわりの環境を顧みないで、結果として企業のシステムを破壊することになるのはダメですから、成長しつつ最低限その組織を健全に維持するのが経営者の責任ではないでしょうか。これまでは利益追求のみでもよかったでしょうが、いまはたとえポーズでも環境にも配慮していますよ、社会的奉仕、福祉もこれだけやっていますよ、ということでなければならない。だから企業倫理とは、最低限、組織を破壊しないところの均衡性だと思います。もちろん経営倫理となりますと、経営組織を環境に合致しながら成長させていくことも課せられることになります。人間環境学部が学生に要請することは、企業活動を常に活発化させながら行き過ぎを抑制できる、相手の立場に立って考えられる、環境とのバランスがとれ、すべてのいのちを大切にする人間に育つことではないでしょうか。

ところで「持続可能性」という外国の輸入言葉よりも、むしろ内発的に発展する地域のだんじりのような文化、村や町のつきあいもたいへんですが（笑い）、共同体的なかかわりをもう一度体験してみることで地域文化のよさが再発見できるのではないでしょうか。ということで人間環境学部は内発的発展の上に乗りつつ、そういう中で環境学を方向づけしていくことが、適切ではないかという気がします。そうなると観光学とのかかわりにも特色が出て他のものとは違ったものになると思います。

武田　先生方のこれまでのお話で人間環境学部の姿が見えてきたようです。そこで中野先生、高校の進路担当の先生や受験を控えた高校生にメッセージがあればお聞かせください。

好奇心の強い人にぜひ来て欲しい

中野　何事にも興味を持つ人になっていただきたいです。自分ではよく分からないが何かをやれそうだと考えている人は、この大学に入って自分にとってやり甲斐のある目標を見つけて欲しいと思います。

武田　自分発見の大事な時期をこの大学で過ごして欲しいということですね。話は前後しますが、人間環境学部（申請中）を設置することになった背景について古谷先生にお聞きしたいです。

学園活性の起爆剤に

古谷　先ほど申しましたように、本学のような都市型大学が21世紀に生きて機能していく上で、この人間環境学部は大きな推進力の一つになって欲しいという願いがあります。といいますのは、従来の古典的な学問の取り組み方、伝統的な法学とか経済学などは重厚な伝統を前提に、しかも細分化した領域での研究が行われて、どちらかと言えば既に一つの評価が確立した状況があって、大学

▲本誌主幹　武田　龍二

の中にはこの領域で伝統的な評価を持つところもあります。その領域はそういった大学にお任せして、実学を掲げる本学は、やはり学問の手法、研究のやり方という点でも十分に実学を意識したものでなければなりません。学生の好奇心、関心を掘り起こし、実際的なアプローチから社会のニーズに応えようとする人間環境学部の誕生は、教育や研究の姿勢として、本学の中心的な考え方を担うものです。この考え方を推進すれば、どんな学部学科でも、「こんなことができたらいいな」と学生と先生が問題意識を共有して、従来の「……でなければならない」という発想を脱していくことができますし、本学の21世紀の姿を非常にユニークなものにしてくれるはずです。そこに新たな大学教育の展望が開けると思っています。

武田　学園といえば短大や専門学校、高校もお持ちであり、環境を中心とした大学と高校の連結のような[illegible]は

考えられないのでしょうか。横浜商科大学と付属の高校の場合、大学にある観光学科が受け皿となって高校に観光コースを設け、そこの卒業生は観光学科に進める進路選択も可能になっています。同じように本学の場合も環境教育を通じて高校との連結はお考えでしょうか。

古谷　いま私どもの附属高校で実際に設けている科目の中には、ビジネスや経営など大学の学部と連結を意識したものもあります。これと同様に環境をキーワードにした連結もカリキュラムに反映することは可能だと思います。先ほどの「総合的学習の時間」などでも、人間環境学部の学生との交流は可能です。しかし、中学生や高校生には、これだけというような限定的な捉え方はさせたくありません。環境マインドの根底となる部分を十分に養っていかねばならないと思います。つまり、やりたいことがあって、そこから数学や英語の必要性が実感できる、そういった積極性をまず第一に考えたいと思います。中学生や高校生が素直な目で人間環境学部の活動を見た時に、好奇心が触発されて、ぜひ取り組んでみたい、そういうものにしていく具体的な努力が大学側に求められるでしょう。先ほどの指摘ではありませんが、中学校や高校の教員が進路指導の中で「環境」を具体的に把握するには今後さらなる努力が要るでしょう。しかし、生徒の関心を育てることは日常的な取り組みでもできるものです。大学と中学、高校との関係を柔軟に捉え、例えば「積極性の育成」というような視点で、連携を図りながら、その中に「環境」や「国際交流」などを取り込んでいきたいと思っています。問題解決能力はそうしたところから芽生えてくるものだと私は考えていますし、環境学は問題発見能力や問題解決能力が問われる領域ですから、最終的には一つにつながっていくことになります。

武田　最後に中野先生、これだけは言っておきたいということがありましたら。

環境は人間が作るもの

中野　環境によって人間は左右されますが、その環境は人間が作るんだということを認識して常に責任ある行動をとらなければならないと考えています。一人ひとりがそう心がけると世の中は少しずつよくなるんじゃないかと思います。原因のすべてを環境に押しつけてすむ時代でなく、21世紀は自分たち人間の力が環境を取り戻すというか、必要な環境を作っていく時代だと考えています。少しでもその目標に近づけるよう努力してまいりたいのです。

武田　ちょっと古い話になりますが、ある著名な弁護士が、離婚の最大の原因は性格の不一致というのが通説になっているようだけど、育った環境が性格を作るのだから、正確には環境の不一致であると何かに書いておられるのを読んだことがあります(笑い)。逆にふさわしい環境を夫婦して作れば離婚なんてありえません。環境という言葉自体、色んな使われ方がありますから、整理して一つの概念に統一するのも環境学の使命ではないでしょうか。また、環境学を学ぶことによって弁護士になりたいとか、本格的に経営学を勉強したいという学生も出てくると思います。こうなると環境学はまさしく自分発見のファースト・ステップということになります。谷口先生、最後に一言。

環境問題を作ったのも人間、解決するのも人間

谷口　環境は人間が作ったものであるということを中野先生はおっしゃいましたが、結論としてはそのとおりです。しかし実を申しますと環境問題は人間が作ったものなんです。ひっくり返して考えますと……(笑い)。心の環境汚染、これを人間のエゴイズムと申しましょうか、それが自然環境や社会環境を破壊してきたと思うのです。だからこの大学では、中野先生がおっしゃいましたように、環境は人間が作るものであり、20世紀の環境問題を解決するのも21世紀の環境を創造するのも自分たちがするのだ、という意気込みのある人材を育てるのが教育目標になりましょう。そういう意味で、私たち一般市民も心の環境汚染が浄化され、なおかつ鍛えられ、その上で行動しなければなりません。その先がけになるような学生が育ってくれることを心から期待しています。

武田　先生方、今日はとてもいいお話、ありがとうございました。